芸振

大分県芸術文化振興会議会報

県芸術教育特集号　No.5　46.3

発行所・大分市大手町　県教育庁社会教育課内　県芸術文化振興会議事務局

発行人・米田貞一　　編集人・田村卓夫

すぐれた学問芸術と県民性

佐藤義詮

封建制度のもとで、小さな藩に分立していた大分県においては、徳川政府に政治的地位を占めることなど、思いもよらなかった庶民（武士を含めて）のなかから、学問や芸術の分野では、著しい成果をあげている。

学問や芸術というものは、階級や制度がどんなにきびしくとも、身分だけではどうにもならない。それはきわめて個人的才能や努力がうんだものである。

しかし、梅園、万里、淡窓、竹田というようなな人物の出現にはやはり一つの系譜といったようなものがある。それを一口でいえば、教育的な環境と呼んでいいと思う。その学問の温床を教育といっているのである。

明治以降になって、全国的な教育機関の整備が統一されたが、それは、教育の普及が形式化されることに眼目があったのであろうが、小藩に分立していた大分県の県民性といったようなものは、やはりその点でもいろいろの特色を持ち、また困難を伴ったことと思う。

それを今日の時点で考えると、進学率、就学率などでなくて、デモクラシイが理解された文化的社会がどういう具合に形成されているかどうかの教育の問題につながるのである。

つまり教育の評価というものは、そのプロセスにおいて考えられるのではなくて、一般社会人として身についている効果についてすべきである。生活上のマナーが教育の問題であるかどうかは、その結論であろう。

すぐれた芸術、学問というものは、それが社会的影響を持たなければ、意味がないのであって、福沢諭吉が大分県に生まれたという誇りは、近世の教育や文化の先覚者というだけでなく、その精神が、県民性のなかに密着することでなければならない。

でなければ、大分県の生んだいかなる学者、芸術家も、わたしたちにとっては、単なる虚像の文化でしかない。

（県芸振会議顧問・別府大学学長）

社会教育と芸術文化

田村卓夫

三月十四日、大分県勤労者創作美術展の最終日、トキハつばきの間に、多種多様の職場で平素創作活動をつづけている絵画、彫刻、デザイン、写真、書道等のサークルの人々が集まり、盛大に表彰式が行なわれた。この会は、大分県（労政課）と大分県労政協会が主催するもので、本年第十四回を迎え質量ともにかなり水準の高い一つの伝統を築いている立派な〝労美展〟である。席上講評のなかで「応募作品は年を追って著しく質が向上しているが、その反面題材が勤労生活からかけ離れる傾向が見えるのは残念」という趣旨の発言がほとんどの審査員から聞かれたのは、まことに同感であった。

もちろん創作活動においては、いろいろな次元や領域に対して追究を試みることは大切であろうが、それは自己本位の耽美主義や芸術至上主義、あるいは閉鎖的な逃避主義、超越主義に埋没してしまうことではなかろう。

県民全体の生涯教育という社会教育の立場から芸術を見る場合、それは芸術のための芸術ではなくて、人間生活そのものの価値を高める芸術文化活動でなければならぬ。特に現代の疎外社会において人間が人間らしく生きるために、互いの連帯感を高めながら創作活動や鑑賞活動を広げていくことが芸術文化の今日的意義なのであろうと思う。

さらに、芸術そのものの目的活動だけでなく、日常の学習活動、奉仕活動、市民活動等のなかへ芸術性をとり入れることが、今日の社会教育に必要でありながら欠如しているのだと思う。生活を真しに見つめ生活課題を解決する学習は、芸術文化活動と発端を一にするものだと確信するのである。

（県芸振会議事務局長・県教育庁社会教育課長）

芸術系大学への進学状況とその指導に関する諸問題

藤　原　正　教

1　**進学状況**・本県における県立高校卒業者で、音楽・美術関係の国公私立大学ならびに短期大学進学者数は、過去3年間で第1表のとおりである。これを昭和45年度についてみると、その年度の大学・短大進学者総数4,525名の3.2パーセントにあたっており、だいたい各年度とも、そうした割合で平均 135名前後の進学とみてよいようである。ただこれを地区別の高校出身者ごとにみると、著しくアンバランスがみられることは注目すべきである。別府市内の高校は、別府に芸術短大があるためか圧倒的に芸術方面への進学者が多いし、この短大の及ぼす芸術的なムードも影響してか、県外の芸術系大学への進学も、他地区の生徒の県外進学者全体の53パーセントを占めている。

これについで大分市郡の高校では40～50名前後と、毎年平均して進学者を出している。これも大分市において多数の有名な芸術家が輩出している伝統や、各種の展覧会や文化的諸行事の実施によって、芸術への関心が高まっていることも原因していると思われる。いずれにしても、この大分・別府両地区で全体の83パーセントの進学者を出しており、他の地区のほとんどは各年4ないし5名程度しか、芸術系に進学していないのは問題である。とくに県南部や豊肥沿線からは、芸術系大学への希望が皆無に近いことは奇異な感じさえ覚えるのであって、かって田能村竹田や滝廉太郎、朝倉文夫と日本を代表する人材を生んだ竹田市の場合、まことに一入の寂しさを感ずるのである。

なお、本県の高卒者で、3年間に比較的多くの生徒が進学した芸術系大学・短大を挙げてみると、第2表のとおりである。

2　**問題点・学校における教育課程と実技試験**

ところで芸術系大学に進学する場合、とくに大きな問題点は実技試験が行なわれることである。実技試験は、大学によって難易の差があって一概にはいえないが、国公立は、東京芸大は例外として、一般的に基礎的なものが多く、私立大は専門性を重視する立場からむつかしいものが多い。

普通高校の通常の教育課程においては、3年間を通じて、芸術科目の履習単位は2～4単位であって、芸術系大学の入試に課せられる実技試験の準備としては、必ずしもじゅうぶんとはいえない。もっとも音楽関係の希望者の場合、多くは幼児のころから音楽の個人教授を受けていて、かなり実技を身につけている者が多いようであるが、一般的には、受験の直前に、基礎的な理論や実技の個人教授を受けているのが実態である。このためにも学校における類型の多様化をはかり、ある程度まとまった数の生徒がおれば、その適性・進路に即応した指導の必要性が感じられる。

・個性や才能の開発の問題

最近、芸術に関する理解が深まり、その方面の大学・短大への進学希望者が漸増してきたことは喜ばしいことである。しかし学校教育の場で、知的学力を伸ばすことが進学指導のポイントであるとの考え方も残っていて、生徒の個性・能力をじゅうぶん開発しているとは思われない。そのためにも、学校におけ

高文連

県芸術文化の原動力に

高　木　　来

県芸術文化の進展とその結果につらなる高校生による文化活動の全県的組織―県高文連は今年ちょうど成人式を迎える。この記念すべき年に連盟の現状と課題について述べることは意義深いものがあると思われる。連盟は現在公私立高校の大部分が加盟しており部員約5万3000名を擁する大世帯である。少額の部員の年間会費で運営し事務局は交替制で現在大分商業高校に置かれている。10部門を有し県内6地区を代表する常任委員によって具体的な運営が行なわれ部長が理事を兼ねていることは規約上の特徴であるといえよう。各部の主要行事を拾ってみると演劇部は夏期講習会、中央演劇祭、西日本コンクールへの参加、そして昨年は県芸術祭主要行事としての県演劇祭に参加し連盟が表彰を受けている。弁論部は中央大会と研修会、美術は席上書道揮毫大会、写生大会に中央美術展、音楽部はリーダー研修会と中央音楽祭、文芸部は「高校文芸」発刊と研修合評会新聞部はコンクールと新聞研究会、職業部は農、工、商、水産各部門研究会、家庭部は地区および県発表会と部誌の発刊、科学部は臨海実験研究調査、阿蘇火山研究会、発表大会、社会部は夏期巡検と発表会などである。各部門共自主的に活動し、西日本や全国大会につらなるものも多いが一般的にコンクール形式から全員参加の発表会形式へと変りつつあるのが現状である。クラブ活動の意義を考えると望ましい姿であろう。

高校クラブ活動の中核的存在となっている連盟の文化活動に寄せる若い高校生の情熱と自主創造の精神は明日を支える若人の人間形式に大きな役割をもつものと信じている。

高文連の課題といえるものは次の諸点であろう。まづ「全員が参加する活動」であって欲しいことである。県下高校生が一人残らず何れかのクラブに所属して自主的積極的な活動をして欲しいものである。次に「他県にも高文連の組織を」と思う。本連盟の調査によると大分の外に島根、石川、北海道と昨年誕生した福井の各県のみである。わけても大分と島根が時を同じくして誕生しており、より活潑であるといわれている。九州各県にも是非高文連が生まれて欲しいと思う。その他生徒の減少による運営費の問題や組織整備、活動の質的改善など取り組んでゆかねばならぬ問題も多い。高文連が県芸振構成の単位団体の一つとして県内各文化団体と共に大分県の芸術文化の進展のために同じ道を歩むことは大変喜ばしい限りである。健康な地方文化を育てる原動力としての若い高校生のたゆまぬ文化への創造活動に関係各位の絶大なるご支援をお願いすると共に直接

る芸術科目の充実、とくに自由な創造力の育成と美に対する鑑賞力や造形能力を高める教育が確立されるよう期待したい。

（県教育庁学校教育課長）

〔第１表〕　高校（地区別）よりの芸術系大学への進学者数

高校(地区別)	43年３月卒		44年３月卒		45年３月卒		合　計
	大分芸短	県外	大分芸短	県外	大分芸短	県外	
中津、下毛	2	6	0	2	1	3	14
宇佐、高田、西	3	4	1	1	3	2	14
杵築、速、東	7	2	2	0	2	2	15
別府市	33	25	33	26	42	39	198
大分市郡	36	12	31	19	27	14	139
臼杵、津久見	1	1	1	2	4	1	10
佐伯、南郡	0	0	0	0	0	0	0
竹田、直、大野	1	0	0	2	1	0	4
日田、玖珠	1	0	3	2	2	4	12
合　計	84	50	71	54	82	65	406
	134		125		147		

（各高校の学校要覧より）

〔第２表〕　進学先大学・短大一覧

大学名	43.3	44.3	45.3	大学名	43.3	44.3	45.3
大分芸短大	84	71	82	大阪芸大	3	2	7
山口芸短大	4	6	15	愛知芸短大	6	1	4
武蔵野音短大	7	5	10	東京音楽大	4	4	3
武蔵野音大	5	4	5	国立音楽大	4	4	2
九州芸術工大	5	5	3	東京芸大	0	5	4

間接に今日高文連を育てて戴いた関係各位のご理解ご指導に対し心から感謝の意を表する次第である。

（県芸振会議理事・県高文連会長・県立大分商業高校長）

作文教育

芸振運動の一翼

森　安雄

作文教育の現状＝小学校の場合＝

現在小学校においては文章表現能力を育てるため「国語科における作文」の指導がなされている。文章表現能力を分析して６年間に指導すべき内容を決定し、学年段階に応じい多様な学習法によって展開されている。主題・構想・叙述・推敲という文章表現の過程に即した指導過程も研究されている。時間数でいうと、国語科は週７・８時間をとり、その５分の２が作文指導に当てられる。それも１週間に必ず１時間は「作文」という特設でなく、各学期毎に、７－８時ぐらいずつにまとめて、作文指導を集中的に行なうしくみになっている。

しかし、文章表現活動に、表現は技術（能力）だけでなく、書き手の認識力育てや、文芸という立場からの美的な要請もある。そこで、このような力は、コンクールや文集活動で、融合して啓発されている。新聞社・雑誌社・放送局の行なう作文コンクールはこのような期待に応えるため、毎年定期的に開催されている。

８・９月は小学館・読売、10・11月は毎日・西日本、12月はＯＢＳ、２・３月は大分合同というように恒例事業として企画されている。１回の応募数が、３～4000点だから、この恩恵を受けている児童は多い。だから、全国レベルをこえ、「作文大分」の名は高い。

この他、社会行事ＰＲのための作文活動も見のがせない。防火・むし歯予防・交通安全・郵政普及・植樹・学校給食・母の日など各機関の要請作文で、子どもは文章表現力と社会連帯感とを同時に啓発されている。

文集活動も盛んである。ガリ版の学級文集、活字印刷の学校文集・地域文集（郡市）、県単位文集（作文大分）を加えると100種に迫る。創刊以来 20号をこした文集（年１回刊行）も多い。県小学校教育研究会（略称小国研）はこれらの文集コンクールも行なっている。

国語科教育としての作文指導、国語教育としての作文活動は二豊の教育的な土壌を肥沃にしている。芸振運動の一翼を担っている。

（県小教研国語部会事務局長　大分大付属小教諭）

開学10周年を迎えた
県立芸術短大

中野幡能

早いもので芸術短大も開学10周年を迎え、卒業生も千数百名になりました。省みると緑丘高校に専攻科のできたのが昭和34年、短大昇格が36年、当時の美術科は絵画、図案、服飾の3コースで50名、音楽科は声楽、ピアノ20名計70名定員でしたが、オーケストラを作りたいというので39年に弦コースを発足、40年には緑丘高校を付属高校として一貫教育を目標にし、41年には県民のためにということで生活芸術を新設し、42年には美術100、音楽50、計300名定員となり、45年には弦コースに管が加わりました。

こうした発展の経過は毎年の卒業制作展を通じて県民に訴えていますが、絵画、デザイン、服飾だけの作品だったのが、43年からは生活芸術のバラエティに富んだクラフトの領域にまで進展してきているのであります。音楽の方では、定期演奏会も始めは短大、緑丘別々に開催していましたが、40年からは合同で開き、その中で管弦楽も県民にきいて頂けるようになり、すでに第6回を迎えました。

さて卒業生ですが、開設年度から全国的な応募者を迎え、卒業生も西日本を中心に全国的に活動しています。美術の方では県美展はもとより、日展・独立・国画展に毎年多数の卒業生が入選しているし、デザイン方面では全国各地の一線で活動し、海外で研究している者もかなりいます。音楽では、東京で行なわれる読売の新人演奏会には西日本から本学が一校毎年出演しています。一般に卒業生は幅広く全国的に活動していますが、県下では県民オペラの中の卒業生の数をみてもお分りになると思います。

このように10年の歩みを続けましたが、これで十分かというと、実は多くの問題点もあります。施設設備の不備、教官人容の不足、学科内容、3年制についての検討、県立機関としての地域開発、付属高校との関係等々、大変な段階に入っているのであります。（県立芸術短大教授）

<資料>

昭和46年度　大分県立芸術短期大学　学生募集要項（抜粋）

1. 修業年限　　2年
2. 美術科・音楽科　　各コースの教育目的

美術科

●絵画コース

本コースは、純粋美術家育成を目的とし特に基礎実技に力をそそぐとともに、それにともなう高度の理論を身につけさせ、将来現代美術の多岐にわたる動向の中で、着実柔軟な態度で対処しうる創造的能力をそなえた美術家育成をめざす。

●デザインコース

本コースは、創造力豊かな専門的職業デザイナーの養成を目的とし、デザインの基本的な理論と造形訓練を通じて商業デザイン、工芸、工業デザインの中から各自に興味を感じ才能に適するものを発見させ、新しい時代の要求に応

書道教育

正しい位置づけに尽力

安部伸平

戦後小学校では必修からはずされていた毛筆習字が、昭和46年から、3年より必修になった。

テーマについてご報告するにあたり、必修であった習字が必修でなくなり、20余年後また、新な観点から必修になったが、書道教育に深い関心を持つ県下の人々が、いかに対処して今日にいたったかを、「大分県書写書道20年のあゆみ」（大分県書写書道教育研究協議会編、昭和43年8月23日刊行）、に求めてみよう。

沿革のはじめに、――、昭和24年度、①6月7日、小学校習字の復活、中学3年の必須、高校の選択必須等重大な問題が山積している現状について意見交換、書道教育の推進をはかるため、研究会結成を呼びかけるとの意見一致をみる。（安部伸平三宮鎮雄、井上寿老）、③12月13日、大分県書道教育教育研究会結成（現名称の前名称）、④1月、別府市南小学校公開研究会⑤2月11日―16日第1回県下学童書道展（45年度22回め）

それから10年後の昭和33年度は、①4月、年間研究目標決定②6月7日、九州書道教育研究会結成準備会（九州各県代表者参集）③6月25日、支部活動実態調査、研究論文募集④8月23日、研修会、8月22日、第7回大分県書き方大会、⑦11月1日九州書道教育連合協議会結成、（第2回大分県書き方教育研究大会を兼ねて）、⑧12月5日、指定研究校研究発表会公開、中津市南部小学校、⑨12月17日、全国書道教育研究会結成準備会出席、⑩3月3日、指定研究校研究発表会公開、日田郡丸山小学校、研修会開催各支部ごとに、

16年目の、昭和39年8月23、24、25日、「第5回全日本書道教育研究大会大分大会」開催（主催、全日本書研・大分県書研・大分県教育委員会・九州書教研）大会の一面、①実演授業者小・中・高計16名、②毛筆習字の必要性強調、③本大会は大阪滋賀、福井、東京についで開催された会であった。④参加者全国からおよそ千余人。

大分県書写書道教育研究協議会は、小学校・中学校・高校・大学の各研究会の連合体である。高等学校研究会は、一度離脱し、その後復帰し、現在離脱の形となっているが、ともあれ、この4つの研究会が、それぞれの学校種別における正しい書道の位置づけのために、尽力した功績は大きいことは多言を要しないであろう。さて、今後の課題としては、教育者がより高い実力をもつことが必要である。研究会としても、郡市ごとの実技研修会（会費無料）、年に2度の実技研修を中央講習会や、

じ得るような基礎教育に重点をおいている。

●服飾コース

本コースは、服飾専門家養成のための専門教育を行なう美術教育を基盤として、服飾デザイン、被服構成によってより高度な被服製作技術を身につけさせ、社会においてもまた家庭においてもそれを広く活用できるように、理論、感覚実技面の習得に必要な教科を主な内容とするものである。

●生活芸術コース

本コースは、高度の消費者教育を目的として、生活に関係ある広範囲の造形について、その理論、実習、感覚訓練を通じ、生活の美化と合理化を正しく理解し得る現代の教養人を育成する。そのためには、基礎デザインによって構成と感覚を訓練し、また、室内装飾、生活用具等、住空間のための理論と実技を習得せしめ、消費者としての高度の生活設計力を養うに必要な教科を主な内容にするものである。

音楽科

音楽科は、声楽・器楽各コースに関して深く専門的な技術を研究修得させ、豊かな音楽的教養と優秀且つ指導力に富む有為な人材を育成することを目的とする。

3. 編成および募集人員

美術科	120名	音楽科	50名
絵画	15	声楽	20
デザイン	25	器楽	30
服飾	25	ピアノ	(20)
生活芸術	55	管、弦楽器	(10)

4. 受験資格

高等学校卒業、または昭和46年3月卒業見込のもの、あるいはこれと同等の資格をもつもの。

5. 出願手続

I 提出書類

(イ) 大分県立芸術短期大学出願票（本学所定のもので、写真は出願日以前3月以内に撮影したもの）

(ロ) 調査書(文部省指定の様式、出身校で作成したもの)

(ハ) 健康診断証明書（本学所定のもの）

(ニ) 返信用封筒(あて名、郵便番号明記、15円切手貼布)

II 受験料 4,000円

※ 受験料 4,000円（為替又は現金）と、上記の書類全部をそろえ、出身高校長が一括して期限内に書留、または現金書留で下記あて提出して下さい。

ただし、特別の事情がある場合には、本人が直接出願書類を提出することができます。

大分県別府市野口原

大分県立芸術短期大学学生部〒874

6. 出願期間

昭和46年2月15日（月）から2月27日（土）まで

○ 受付時間は午前9時30分から午後4時30分までとする

ただし、土曜日の午後および日曜日は除く。郵送の場合は2月27日の消印まで有効とする。

7.～16. （紙面のつごうで省略）

実地授業研究会を県下3ヶ所で毎年開催している。

多くの人々が、全国大会後、ますます実の入った研究を進めているのが現状である。

（県書写書道教育研究協議会長・大分大教授）

音楽教育

すばらしい会員のハーモニー

田坂　保

大分県音楽教育研究会の発足は昭和25年もはや20年をこえ各教科の中では早期の結成で、郡市を一単位とし小中学校の理事二名で理事会を構成、研究の場合は幼小中高校も一体となって進めてきた。高校の場合は、高文連の一環として独自の立場をとってきているが、過去2回の九音研大会等には合同して研究に当ってきた。

本部事務局は会長のところに置き、小中各5名のエキスパートを集め企画運営に当る。事業としては実演授業と研究演奏研究発表を中味として県音研大会、技術講習、講演会加えて指定研究校の発表会は全面的に協力し中心部の高まりを地方にまで及ぼすための組織的な方法として定着し、効果をあげている。

音楽人のよさはそれが愛と真実を教える音楽、という特殊性もあって、全員のハーモニーはすばらしくよいため、研究上の調和と発展が確実に行われている。

以上現況をのべ、次に課題を記する。

1．現職教育の方法

大学を卒業して現場に出てきた教師たちは中学校は専門でありかなりやれるが、小学校の場合下地がないと多くの教科の研究の中で技術という時間を要する教科の研究だけに、その練習の時間を生み出すことがむつかしい。そこで1日くらい中央の講師を招いて実習的な講習会をもっても、僅かにその方向を見出す程度で徹底しない。となると中央まで出かけて十分時間をかけて研修するか、師を選んで精進するか外はない。

できれば3、4の領域を設けてまとめて、継続的に研修の機会を設けたいと考えているが、容易なことではない。

2．楽器の購入について

戦後の変わった教科は音楽と図工といわれている。次々に出てくる楽器においそれと学校に購入できない。も早ピアノの2台目がほしい時期にもきている。

楽器の質もよくなり値段も上ってきている。国の費用で買える補助のわくはせまく数量が限定されている。

音楽の美を追求しはじめると金にしばられどうにもならない

波紋

才能教育と底辺のエネルギー

十時　良

才能教育が叫ばれて久しいが、県下でも、〝おけいこ事〟とよばれるものに熱中する風景は実に多い。経済の高度成長と文化意識の高まりだと言えばそれまでだが、ピアノ・絵画教室から書道塾・舞踊まで数限りない教室がはんらんしている。大部分は子供であるがこれが果して芸術教育の基礎となっているであろうか。―才能教育につながったコンクール主義が目立つ、競い合うことそのものはけっして悪いことではないが、入選だ、入賞だやれ優秀校だと賞状そのものに目の色をかえる―全体の質の向上や一人一人の才能のみきわめは問題にしない、特定なものの技術の特訓である。たしかに一部技術の向上はみられるかも知れないが、これで本当の県民の芸術文化への底辺が育っているであろうか―多くの場合が親のミェや浅はかな文化意識に過ぎないのではないか、子供は〝やらされている〟といった傾向が強い、この場合問題になるのは、親の芸術や文化に対する考え方であり、また、そのような意識を持たせるひずんだ社会の高度成長でもあろう。

このようなことは学校教育の中でも言える、何々コンクール、何々展覧会といいるであろうか、この場合問題になるのは、指導者の意識であり又そのようにさせられている学校教育のシステムに問題があろう。

本来芸術や文化は心の豊かな環境の中にこそ、育つものである。うわべだけの「技術」や「らしさ」にふれるだけではエネルギーとなる底辺は育たないのではなかろうか。

（県美協委員・大分市立坂ノ市中教諭）

「芸振」昭和46年度編集計画

- **第6号**＜5月発行＞県音楽特集号＝県音協、県民オペラ、県交響楽団、県吹奏楽連盟、県合唱連盟、県作曲界、県軽音楽界、県邦楽界、県詩吟界、県音楽鑑賞団体、作品など。
- **第7号**＜7月発行＞県演劇特集号＝劇団、人形劇、職場演劇、舞台美術、県芸術文化に対するアンケートのまとめ、など。
- **第8号**＜9月発行＞県舞踊特集号＝洋舞踊、日本舞踊、県芸術祭関係を含めたもの。
- **第9号**＜11月発行＞県立美術博物館建設促進特集条＝県立美術博物館期成会、県立美術博物館に対するビジョン、近県の例など。
- **第10号**＜1月発行＞県文化財特集号＝県史談会、県文化財保護、茶道も含めた。
- **第11号**＜3月発行＞地方文化団体特集号＝市町村文化活動、公民館、青年団、婦人会文化活動、農漁村と文化、避地と文化活動など

※第7号以降はまだ具体案ができていませんので今後の編集についてのご希望ご意見がありましたら、県教育庁社会教育課内県芸術文化振興会議事務局か、または直接編集担当者まで申しつけください。＜編集担当者・大分市中島中央2丁目1―23　〒870 菅久＞

と映かざるを得ない。

痛んだ楽器の演奏は情操の育成にならないし困った問題である。

しかし現場人の教育的な熱情は不合理を克服し、何とか創意工夫して合奏大会など質の高い音楽を創り出していく努力を重ねている。　（県音研会長・大分市立金池小校長）

造形教育

九州の先頭に立つ

仲町　謙吉

大分県造形教育研究会は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学と校種別に系統的研究組織と、郡市別に地域的研究組織から成立している。このように民主的で大きな組織をもつ会は、造形分野でも全国的にみても数少ない。この組織ができたのは、20数年前になるが、最も活動が充実したのは、36年に第14回全国造形教育研究大会を別府を中心に開催したその時以来である。現在も益々発展し県下造形教育振興に大きく役立っている。役員は会長仲町謙吉（大学）副会長（校種別代表者）宮本百人（幼）桑原泰（小）工藤工（中）田中昇（高）桑原準一郎（大）の5名、幹事長、吉村亨（ろう）および幹事・委員（郡市代表）監査・顧問（退職者の中からと教委の中での関係者）となっていて、任期は1年で毎年5月末頃改選しその年度の役員を決定する。総会は、毎年1回県大会の開催地で行ない事業・決算の報告、予算・行事・役員の承認をする。通常は委員会（郡市代表者会議）に総会は委託しこの会議で決め総会では承認をする。幹事会がその執行に当っている。

年間の主な事業は（45年度分）1学期に第19回大分県児童生徒創作美術展、参加約20万、郡市入選約2万、県入選2千、推奨3百点を決定した。2学期には第12回デザイン展、これも創美展とほぼ同じ程度、更に第16回大分県造形教育研究大会（三重大会）を盛大に開催した。3学期には第9回版画展を催し多大の成果をあげている。

この中で特に16回の三重大会は、大野郡各町村教委の援助と指導を得、斉藤・小代各所長、伊藤・有田各校長、河村指導主事、更に多くの先生の協力により未だかってない参会者を得て有意義に盛大にできたことは特筆すべきことで、造形教育の今日的意義が、地域の中で、実践を通して再確認がされた。こうして県下の各地から新しい芽が育っことは大分県教育に対して大変な意義と役割をもつものだと信じる。

今後の課題は、これだけの大事業をしているのだから県費の補助が当然あっていいと思うが、会の仲展と共に予算をどうす

るか。次に効果的行事のもち方の検討。研究内容面からは校種別に新指導要領にしたがって年次順に実践段階に入るわけで、これに対応する研究の深め方をどうするか。他方、九州幼年美術夏季大学「阿蘇青年の家集会」も今年で2年次。更に「しだか湖」集会を計画中、九州全体の動きも活潑になり始めた、大分県はこの組織力をもって九州の先頭に立ってその推進の要とならなくてはならない。

（県芸振会議理事・県造形研会長・大分大助教授）

舞踊教育

ダンス発表会の実現をめざして

野　中　田　鶴

学校における舞踊教育は昭和20年、敗戦を境に既成作品の指導から創作する指導へと著るしい転換をし、今日に至っている。

その間直接指導にあたつた女子体育指導者は悩み苦しみ、研究を重ねてきたが、果して現在どれだけの成果をあげ得ているのだろうか……次のような問題点が考えられる。小学校は別として、中学校、高等学校をみると、女子体育指導者が全くいないところもある。「指導者の不足」次に中学校保健体育科の中の一分野であるダンス（舞踊）は、年間授業時数15%～25%である。「授業時数の不足」これだけでは作品の発表会、鑑賞ということはとうていむつかしい。昼休み、放課後、休暇にくいこんだ活動をやらなくてはならない。クラブ活動として「ダンス部をもっている学校は少数である。」「ダンスは女子がやるものだという観念がぬけきれていない。」などである。次に活動状況をみると、授業中に創作されたダンス、又はクラブで創作されたダンスの発表の機会はどうであろうか、文化祭、体育祭歓送迎会、土曜日の午後といった学校行事として、又はその合間をぬって行なわれている。かって大分県女子体育研究会主催にて3回ほど、市内幼、小、中、高、大学にわたってのダンス発表会を行なった。第1回は県教育委員会後援のもとに、全九州大学体育大会の体操競技で行なうダンス（本質から考えて採点せず発表のみとした。）を、大会前日に各大学に参加してもらい、市内小、中、高、大学の希望校のみの参加で盛大に行なった。第2回、第3回は、駅ノ原大分大学体育館で行なったのである。その後つづけたいと願っていたが、国民体育大会のマスゲームの創作、諸行事、県内外の競技会など多く、体育指導者にとって大いへんな負担がかかることになり、中断したままとなっている。しかしダンス発表会をやろうという声も出ているし、一年に1回程のダンス発表の機会はもってもよいのではないかと考えるし、是非実現させたいと念願している。ダンスは体育科の中において健康や体力をつくる運動として、又活動それ自体を楽しむ運動として関係深いが、表現する運動としてダンスの特性を生かした指導をしていきたいものである。

（県女子体育研究会長・大分大助教授）

こども劇場

親子の交流と集団あそび

二　宮　敬　介

「子ども劇場」の広がりは5年前、福岡市で青年や母親たちの、献身的努力によって誕生し、その輪が大きく全国に広がっていった。

大分でも、他県の〝まねごと〟ではなく、大分は大分のカラーで作ろうという話が出て、文化団体や、多くの母親たちの手によって昭和45年8月「大分子ども劇場」が誕生した。子どもによい文化をあたえるだけでなく、子どもたちの感受性や創造性を豊に育て、現在問題とされている少家族制度の核家族、夫婦共働によるカギッ子、教育ママ、過保護……いろいろな点で親子の交流が少ないので「子ども劇場」によって親子の交流を深め、子どもたちの集団あそびを広げて行きたい。現在の会員は 1,000人、安い会費で多くの催をすることはとても困難である。毎回の催をするたびに赤字が累積されて行く、不安でたまらない。しかし、いま、くだけてしまえばいままでの努力が水の泡である。観劇例会のほかに屋外例会（キャンプ、ハイキング）、子どもまつり、各地域でのサークル活動と行動範囲は広く、やることは山積されている。「子ども劇場」をスムーズに運営して行くためには、最低 2,000人の会員が集まらなければ不可能だ 2,000人の会員にするためには、まだまだ多くの努力と犠牲をはらわねばならない。しかし、県内ではじめて誕生した「大分子ども劇場」が軸となって、その輪が県内に広ろがろうとしている。

今後、誕生する県内の「子ども劇場」のよい道しるべとしての課題も大きい。県内の各文化団体のご支援と、ご協力によって〝子どもたちのしあわせの輪〟が、大きく育つよう願うものである。

（県芸振会議理事・大分こども劇場代表委員・県人形劇サークル協議会長）

消息

・県民バレエ「白鳥の湖」特訓

今秋10月1日、県芸術祭の開幕を飾る県民バレエ「白鳥の湖」（全4幕）の主役オデット（白鳥）に別宮恵子、オディール（黒鳥）に中津留美恵さんが正式に決まり、演出の柏谷辰雄氏（東京青年バレエ団幹部団員）を迎えての総合練習が4月1日から大分市内のバレエ研究所で始まる。合同練習には王子ジクリード役の江川明（東京）悪魔ロットバルド役の池田貞臣氏（東京）も参加する。

・県洋舞踊協会近況

(1)本年2月16日総会を開き、新規約をつくり、会長（1）顧問（1）常任理事（4）理事（2）特別正会員（2）正会員（7）を定め、協会員の総務を結集して県芸術祭の幕明けにふさわしい充実した県民バレエ「白鳥の湖」の舞台に全力を尽すことにした。

(2)演出振付者・東京青年バレエ団幹部、桐朋学園大学講師柏谷辰雄氏。

(3)総出演者・県洋舞踊協会に所属する7バレエ研究所の協会員及び研究生たち約90名で編成、他に男性舞踊踊手7名を中央より招く。

(4)県洋舞踊協会事務局・大分市金池南2丁目16—16電話②0732　②2662　笠木啓子バレエ研究所内

・佐藤朱音バレエ研究所開設10周年記念リサイタル

4月4日(日)大分市文化会館ホールで第一部パ・ド・ドゥ集第二部花、それに創作バレエ「高千穂ばなし」が佐藤朱音さんと賛助出演の池田貞臣、間宮則夫、本多弘明の各氏ほか研究所助教師、研究生によって上演される。

・大分市本町に新しく本町晃星堂書店がお目みえするが、その階上にギャラリーが付設される予定。

・昭和46年春季県美展

会期6月8日（火）～13日（日）大分市トキハ文化ホール、無鑑査制公募展であるが一般出品の優秀作品には賞を与える。1人1点、大きさ20号以上、版画・彫刻・工芸は別に制限なし

県民バレー「白鳥の湖」第1回練習風景
（写真は大分合同新聞社提供）

出品料一般700円、搬入6日トキハ5階、問い合わせは、大分市中島中央2丁目1—23、県美協春季展連絡所、菅久方電話②[redacted]またはもよりの画材店へ

・宮崎県立博物館が落成

宮崎県では総工費6億5千万円をかけて県立博物館をこのほど完成。3月7日落成式を行なった。落成式には本県美術協会長の宮崎豊氏が出席した。

新しい博物館は鉄筋2階建てで、美術ホール、文化ホール等を含む総合センターとなる予定。

・大分県婦人会館も落成

大分市城崎町に3月29日、大分県婦人会館が落成した。鉄筋地上4階のビルで、会議室、宿泊施設、食堂等まで完備している。電話大分局④0015

・米田会長、新居に移転

県芸術文化振興会議会長米田貞一氏はこのほど大分市から別府市の新居に移転された。新居は別府市新別府5組、まだ電話がないので、急用の方は電報もしくは速達にて連絡していただきたい由。

・郷司幸雄（県詩協世話人・心象同人）3月末転勤のため鹿児島県名瀬市小俣町1[redacted]へ転出〒894

民謡歌詞募集　大分県の中央部に位置し、久大本線の沿線にある挾間町では、町を象徴し、町のイメージアップにふさわしい民謡歌詞を募集する。

〔募集内容〕
一節が7・7・7.5とし、4節以内とするが、特にすぐれたものはこの限りではない。

〔賞金〕入選　1編　3万円　　佳作　3編　記念品

〔締切〕昭和46年5月20日（消印有効）

〔発表〕6月上旬「挾間町報」ならびに大分合同新聞紙上

〔審査〕県社会教育課長田村卓夫、大分合同新聞文化部長宮瀬香多士ほか

〔応募資格〕限定しない。

〔その他〕
1　入選作品の著作権は挾間町文化協会に帰属し、応募原稿は一切返却しない。
2　応募は必ず封書とし、わかりやすい文字で1節ごとに行を変え、句読点に注意すること。応募点数は問わない。
3　原稿にも住所氏名を明記すること。
4　資料必要の場合は挾間町文化協会あて照会すること

〔原稿送付先〕大分県大分郡挾間町中央公民館内挾間町文化協会（郵便番号879—55）

※歌詞参考例　わしが想いは宇曽さん山よ　ほかにきはないまつばかり

編集後記

・第5号の原稿も集まりが悪く2月28日の締切りが3月末日になってしまった。この原因はどこにあるのか？課題である。
・もっとも教育関係者にとって、この3学期は年度末と異動期で他人ごとではないかもしれない。浮足たった季節である。
・桜も咲きはじめた。早く選挙も終わり安定した中で仕事ができる日を待ちたい。
・第6号は「県音楽」特集である。すでに執筆依頼のためのプランもできているので早く発送して予定の5月中には発行したいものである。関係者のご協力を切にお願いします。
・ところで県下各層から大分県の芸術文化に関するアンケートをたくさん頂戴しているが、紙面のつごうでこの号にのせることができなかった。第7号に集録する予定。悪しからずご了承ください。　（S）